



Nogizaka Detective Agency

デビル・アイ

奥能登連続殺人事件

Akinara Kiyu
彬原希勇



Devil Eyes

デビル・アイ

彬原希勇

— 奥能登連続殺人事件 —

装丁・イラスト 溝上なおこ

【 登場人物 】

- 藤枝^{ほつみ} 初水 (44).....敏腕私立探偵
- 秋葉 真治 (21).....依頼人。東京都内の大学に通う学生
- 西崎 玲奈 (20).....秋葉の恋人
- 神下 正彦 (40).....ヘル・ハウスのオーナーで古美術収集家
- 大野 芳明 (38).....富山市内の病院で働く内科医
- 阿部 太一 (27).....金沢市内の大学の准教授
- 高島 茂 (45).....富山市内の宝石商
- 田丸 美代子 (68).....ヘル・ハウスの宿泊客
- 峰岸 彩夏 (19).....ヘル・ハウスの宿泊客の女子大生
- 世良 辰蔵 (52).....珠洲署の刑事課長
- 登間^{とま} しず乃 (71).....能登地方の民話の語り部
- 恩田 幸伸 (35).....地元の猟師
- 樋内 吾郎 (58).....ヘル・ハウスの従業員
- 中村 桃子 (?).....自称 金沢市内の大学の学生
- 宝家^{ほうや} 圭介 (32).....敏腕私立探偵
- 小林 むつき (43).....私立探偵で物語の語り手

■ 目次

序章	5
第一章 謎の病死	7
第二章 地獄の家と悪魔の瞳	24
第三章 神秘の伝説	44
第四章 真夜中の物音と逃げる人影	61
第五章 精霊の島	80
第六章 疑惑の銃声	94
第七章 愛のメッセージ	138
第八章 全容解明	164
第九章 消えた人	189
終章	201

序章

ヒトは何者であれ、幼い頃は純真無垢だ。

わたしも、人間社会の光と闇を知る前の少年時代、祖母が語るおとぎ話を純粹な心で受け止めた。その「世界」が、本当に存在すると本気で信じたのだ。

祖母はわたしが六歳のとき亡くなった。残念ながら、今、彼女の顔を思い出そうとしても、脳裏のキャンパスは真つ白である。しかし、優しいテノールで静かに語られた数多くの物語は、今も鮮やかに思い出すことができる。

空飛ぶ青いウサギ、草むらに潜む小さな人間、山を呑み込む巨大なクジラ……。

そんなモノが、自分の住む世界のどこかにいると、本気で考えたのだ。

大人になり、祖母の語りに該当する本を探しているが、今だ一冊も発見していない。あれがオリジナル・ストーリーだったとすれば、わたしの祖母は、実際に空飛ぶ青いウサギの世界にいたのかもしれない。

そう思えるほど、彼女の語りはリアルだった。

わたしの名前は、小林むつき。現在、四十三歳。平凡を絵に描いたような中年男である。

しかし、こうした存在感の薄い人間こそ、特異で不思議な物語の語り手に相応しいと思うのだ。

今回記す物語は、わたしが平凡なサラリーマンから探偵稼業に転身して三年目の夏に遭遇した大事件である。謎と不思議に満ちた怪事件だ。取り掛かりは、探偵稼業の定番と言うべき身元調査だった。しかし、様々な謎の事態発生と不思議な人々の登場で、その仕事が奇奇怪怪な事件へ変貌していく。

今回の事件の最中、わたしは少年時代に熱中した祖母のおとぎ話さながらの「伝説」を耳にする。いや、この「伝説」の世界観は、青いウサギや巨大クジラのレベルではない。まさに、宇宙的なスケールである。

しかもそれは、卑劣極まる犯人が暗躍する殺人事件というステージを、まるで神秘のヴェールのように彩るのだ。

これから記す物語に、空想や幻はまったくなくない。すべて、わたしと相棒が自分の両眼に焼き付ける現実だ。そして、謎と不思議に満ちた怪事件を、わたしの相棒が鮮やかに解き明かす物語だ。しかし謎は解けても、わたしたちが遭遇した幾つかの不思議の答えは、結局最後まで発見することができなかった。

では、語りを始めよう。わずか二日間に、複数の尊い命が「消えた」恐るべき殺人事件だ。また事実として、リアルな現実として、宇宙的スケールの世界を垣間見た物語である。

第一章 謎の病死

真夏の太陽が、大都会のコンクリートジャングルを容赦なく照りつける。外気は気温35度、湿度80パーセント。ヒトが堪え得る限界に迫りそうな、灼熱の一日の始まりである。

八月十日、午前9時少し過ぎ。港区南青山の乃木坂通りは都内でも有名なショッピングストリートだが、連日の灼熱地獄では人通りも少ない。わたしの職場「乃木坂探偵事務所」はこの通りに建つ高級マンションの一階で、我が家が七階のペントハウスだ。

今年で三年目になるハイセンスな街の暮らしを、わたしは思い切りエンジョイしている。白い石畳みの歩道、マロニエの木、建ち並ぶブランドショップ、そして、仕事と私生活の両面で、わたしの人生を豊かにしてくれるふたりのパートナー。

三年の歳月は山あり谷ありで、これからも様々なトラブルに立ち向かうだろう。しかし、彼らふたりとわたしの人生が、別の道に行くことはない。命尽きるまで、この街で寄り添い生きていくのだ。

さて、仕事開始時刻を少し過ぎた事務所のオフィスには、わたしと愛すべきふたりのパートナー

がいる。今までも、これから先も変わらない日常の風景だ。まずは、彼らを紹介しよう。壁際のパソコンデスクに座り、依頼人ファイルを整理している人物が宝家圭介である。この人物を命の限り愛し続けると誓ったとき、わたしの人生が変貌したのだ。男の名前で名言葉を使うが、完璧な美貌と妖艶な色気、そしてこの上ない気品を兼ね備えた完全無欠の女性だ。ただし、本人が圭介と名乗り名言葉を使う限り、わたしの語りの中ではこの人物を「彼」と記していく。その顔立ちやスタイルは、例える対象がない。美人を言葉で伝えるとき、「○○に似た」と有名な女優やモデルの名前を出すのが、圭介にはこれが使えないのだ。彼の美貌と色気と気品に匹敵する女性は、この世に存在しないということである。現在三十二歳の、「絶世のヴィーナス」。探偵の実力も言うに及ばない。世間を騒がせたあの「佐和邸連続殺人事件」を、見事な推理と完璧な観察力で解決した。今は、都内でもベストファイブに選ばれる敏腕私立探偵である。

ただし、今回の物語の主役は彼ではない。主人公は、応接のソファに踏ん反りかえるもうひとり的人物である。

長い両足をテーブルに乗せ、新聞を広げる男が藤枝初水だ。去年、「初見」という名前を改名した四十四歳だが、彼はとても中年男とは表現できない。卵型の小さな顔は日本人離れた彫りの深さで、太い眉、切れ長の両眼と涼しげな黒い瞳、高く通った鼻筋、そして形の良い唇……。さらに、芸術的な筋肉が作り上げる男の理想というべき逆三角形の体格で、身長は185センチである。短く刈り上げ、トップを逆毛立てた豊かな黒髪も含め、「中年」という言葉とは無縁な美形だ。

また性格も、筋肉同様にワイルドである。強いハートと深い包容力、そして高い理性と冷静な判

断力を備えている。ルックスであれ、性格であれ、男性の理想を絵に描いたようなこの男、藤枝初水と出逢ったとき、わたしは自分の試練を実感した。

圭介を巡る恋のライバルとしてわたしの前に現れ、幾つもの「試練」を乗り越え、今は絶妙な関係を築いている。そう、初水は無二の親友であり、わたしと同じく圭介を愛し、共に生きる人生のパートナーなのだ。

ただ、私立探偵としての実力は、まだ圭介に追いついていないのが現実だろう。今回彼が挑む大仕事でそれなりの推理力を発揮するが、「佐和邸連続殺人事件」をひとりで解決した圭介とは、状況が少し違う。また、事件に巻き込まれるキッカケとなる最初の依頼も、異例だった水神村の大仕事とは正反対だ。はつきり言って、事務所開設以来最低の「しょぼい」依頼である。

夏真っ盛りの八月十日、午前9時20分。わたしたち三人のたわいのないお喋りの花満開のオフィスに、来客用チャイムが響いた。「しょぼい依頼」を持ち込む、一週間ぶりのお客であった。

わたしのエスコートでオフィスに入って来た依頼人は、二十歳前後の若い男性だ。黒いTシャツに胸ポケット付きの麻のベストを羽織り、ボトムはカーキ色のカーゴパンツという、今時の若者ファッションである。自然色の短い髪と、細身の体格。多少顎が張り出しているも、目鼻立ちの整ったさわやかな印象の好青年だった。しかし、暗い表情はこの好青年も例外ではない。自分で解決できない悩みをスッキリ消してもらうために、人々は探偵事務所へ来てお金を払うのだ。他人にすれば呆れるほど些細な事でも、本人は夜も眠れないほど悩み思いつめている。

来客用ソファに座った若者の目は、真つ赤に充血していた。

「さ、顔を上げて」

客と向き合ういつもの席に身を沈めた圭介の優しい一言。初水は彼の右、わたしの定位置は少し離れた椅子である。来客対応の軸は圭介で、わたしがアイス・コーヒーを用意する間に、個人情報や依頼内容の厳守、基本料金などの説明を済ませた。依頼人が男性の場合、圭介の美貌と色気は最高の癒しになるようだ。

この好青年も例外なく、頬の紅色が暗い表情を少し改善させた。

「それじゃ、あなたのお名前と依頼を聞かせてもらいましょうか」

「はい……」

アイス・コーヒーを一口飲み、再び視線をテーブルに落として青年は話し始めた。

「俺、秋葉真治っていいいます。都内の大学に通う学生です。実は……その……」

「なんですか？」

「彼女が……なぜか突然会ってくれなくなりました。三日前から、本当に突然です。ケータイも自宅の電話も通じなくしている。俺、ワケが分からなくて……」

「それは、失礼だけ……」

圭介の言葉の先は、秋葉にも読めたようだ。顔を上げ、強く左右に振った。

「違います。冷めたとか、俺が嫌いになつたなんて事じゃない。これを見てください」

デイバッグから出し、テーブルに置く一枚の写真。彼と若い女性が寄り添うツーショットだ。秋